

附属図書館長に就任して

— 図書館の現状と当面の課題 —



植村 啓治郎

このたび、思いがけなく附属図書館長を勤めることになった。学部ないし学科の図書室で図書委員を勤めたことはあるが、図書館の運営に参加した経験はなく、また、部局管理運営の仕事を離れて6・7年も経っており、この仕事をうまくこなす自信はない。ただ、永年お世話になった熊本大学に対して、最後のご奉公としてできる限り努力したいと考えている。現在、大学図書館は共通の重要な課題をかかえているが、本学の附属図書館にも固有の課題がある。まだ、十分理解できていない点が多いが、折角、表題のようなテーマを与えられたので、この機会に知り得た限りで、本学附属図書館の現状と今後の課題について述べ、学内の皆様のご理解とご協力をお願いしたいと考えている。

現在、国立大学の図書館は、新時代の図書館へ向けて体質を改善する時期にあるといえよう。そこで追及されている主要な課題は、①大学設置基準の大綱化のもとでの大学図書館の自己点検・評価、すなわち個性を生かした図書館機能の充実へ向けての自己改革と、②図書館業務の電算化による学術情報の提供サービスの充実の二つである。

本学附属図書館の場合、学習用図書館としては、ある程度機能していると評価されてきた。しかし、研究用図書館としての機能は十分に果たしていない。その理由は、ほぼ同じ条件をもつ他の大学と同様、創設以来の事情から、本学も研究用文献資料の大多数が、中央図書館に集中配置されるいわゆる「集中型」ではなく、学科ないし講座の研究室に分散配置されるいわゆる「分散型」であり、その傾向が他大学に比して著しいからである。この「分散型」は、専門の研究教育にとっての利便性ですぐれている反面、文献の重複購入や重要な文献の欠落を生ずる結果をもたらしている。いずれの方式にもそれぞれ長短があるが、収容能力の点で限界に達するところが出始めている「分散型」は、OPAC（オンラインによる目録検索システム）の充実に合わせ、また、予算の削減や図書費の高騰による目減り現象への対応としての予算の有効利用、図書の活用・管理等の面からも再検討の時期がきている。現在の「分散型」の長所は生かしながら、中央図書館の

研究用図書館機能を充実させる方向での「集中型」管理を考える必要があるだろう。かつて、黒髪北地区の部局長・評議員によって検討された再開発問題の報告書でも、同様の点が指摘され、特に文系の研究教育にとって文献資料が不可欠の手段であるとの観点から、附属図書館を北地区再開発のキー・ポイントとして場所的に4部局の中央に位置付けるべきであるとしている。この構想を、直ちに実現することは困難であろうが、現状で研究用図書館機能を発揮させるためには、時間的に何時でも利用できるカードによる自動入館システムを導入することが望まれる。

図書業務の電算化の面では、昭和62年から電算化システムが稼働し、閲覧・目録・雑誌等の館内処理や学術情報センターとの接続が行われ、OPACによる学内の文献資料の検索・利用、さらには、学内外の研究者のデータベースの蓄積・検索、ファクシミリによる複写物の伝送、ILL（図書文献の相互利用）も可能な段階になっている。ただ、本学図書館の最近の調査によれば、学内文献のデータベースの遡及入力（カード式によっていた図書目録に遡って入力すること）は、他の国立大学の多くがこれを実施し始めており、本学は遅れをとっている。規模に比べて職員数が少ない本学図書館の場合、従来からの業務で手一杯で、他大学のように自主的な努力も期待できない状況である。また、学内LANの仕様変更に伴うOPACの環境整備も、緊急に対応しなければならない課題である。

施設・設備の面については、現在の中央図書館は全体として狭隘になってきており、上記のような研究図書館機能を充実し、旧図書館の書庫を利用してなお限界に達している図書館の保存機能を確保するためにも、現在概算要求中の中央図書館の増築の早期実現は特に重要な課題である。

図書館の仕事をして、奇異に感じることは、ときには図書館は大学のシンボルといわれながら、予算面では、独立性もなく、プライオリティもないことである。管理運営費については、その相当部分を学内供出の大学本部運営費に依存しており、大学図書館に共通の課題の一つである遡及入力に取組むために自前で予算を

割振ることもできない。図書資料購入費についても、使用目的・範囲が限定されており、希望の多い重要な文献の欠缺を補い、バランスのとれた集書計画を行うなど、研究用図書館機能の充実のために、独自の判断で、予算を重点的に活用することも困難である。これらをカバーするためにも、学内での特別枠の予算措置を要望したい（特に遡及入力のための予算は指定の大学以外には予算措置はしない文部省の方針である）。予算措置といっても、その総額は自然科学の科研費1プロジェクト分程度のことを考えている。これを回転資金的な資金として活用すれば、これらの業務を飛躍的に進めることが可能になると思われる（もっとも、予算が増えればそれだけ仕事も増える側面もあるが）。た

だ、その場合でも、予算の必要性や使用の内容については、図書館委員会の機能をより活性化するなど、十分に各部局と図書館との意志の疎通を図り、全学のコンセンサスを得られるよう努力する必要がある。予算がなければ何もできないと言うつもりはないが、その予算面の裏付けがあれば、そこに表された全学の意志を受けて、図書館の職員も、今以上に自信とプライドをもって、利用する立場からの意見を反映させながら、業務の改善・新しい時代の図書館の構築へ努力を積み重ねることができると信じている。

直面した問題についての考えを述べ、今後解決すべき問題についてのご協力をお願いして、就任のご挨拶に代えさせていただきます。

（法学部教授 商法）

閲覧室にて

宮田 健

今、変革の時代の中で図書館の役割が問い直されている。ニーズの多様化に伴い、多機能をもつことが望まれるが、大方の関心は情報の蓄積と提供の方法に集中している。図書館（薬学部分館を指す、以下同じ）の将来像として情報センターのようなものを予想し、希望する声が高い。図書や閲覧室の充実は、場合によっては、時代に逆行すると考えられている節がある。

実態を確かめておきたいと思い、過日久し振りに図書館で一日を過ごした。学生がどのように、どの程度閲覧室を利用しているかを特に見ておきたかった。

図書館の利用者は最近著しく増えている。過去3年間の年間平均入館者総数は約74,000人（うち夜間入館者約15,000人）で、薬学部の教職員・学生数520人からみれば大変な数である。学外・他学部からの利用者も多い。

確かに絶えず人が出入りし、複写機の利用は特に多い。しかし閲覧室に設けられた50の座席の多くが占有されることは余りない。教官が腰を据えている姿を見ることは稀である。必要な図書は借出すか複写後、多くの用務の合間を縫って自室で目を通す。情報の検索も自分の研究室のパソコンで行う。

時間帯にもよるが昼間閲覧席を占めるのは殆んど学部学生である。机上には教科書、ノート或はそのコピーが並び、採光がよく空調が効いた快適な自習室であり、恰好の仮眠の場と考えているらしい者も見受ける。図書館は利用されても図書は利用されないという現実がある。

しかし、学生が閲覧室は居心地がよく、気分よく勉強できると考えていることは、図書館離れを起こさないという点だけにおいても大きな意味をもつ。図書館に馴染めば図書館蔵書にも関心をもつようになり、図書離れを少しは防げるかもしれない。いわゆるearly exposure効果の実を挙げるためには、もっとアピールする学生図書、特に学生選書を増やす必要がある。現在の、教官の選択による学生図書は研究図書の色彩が濃く、専門的に過ぎる傾向がある。

一方、約29,600冊の蔵書のうちには貴重図書も少なくないが、全く利用されず価値が無くなった図書・資料も多い。収容スペースの問題や遡及入力との関連もあって荷物になっている。薬系図書館としては戦前西日本随一であった歴史をもつが、蔵書数を誇る時代はとうに過ぎた。思い切った整理が必要な時期にきている。ディスプレイも工夫すればもっと良くなるであろう。

夕方から夜間にかけて閲覧室の様相はかなり変わってくる。実験に区切りのついた大学院生が増えてくることによる。彼らは独立した研究室を持たないこともあって多様な使い方をする。CD-ROMによる情報検索、データ整理、図表作成、複写等々…。活気に満ちており、多機能を備えた贅沢なオフィスを与えられたと同じような効果を挙げているように見える。終夜開館の便宜が図られるようになれば、さらに活用されるであろう。コンビニエンスライブラリーという言葉がふと想い浮かぶ。